

2 学校研究主題について

平成 23 年度研究主題

「ひろしま型カリキュラムを活用し、言語活動の充実をめざして

～『いいとこ見つけ!』カードを活用した開発的生徒指導を通して～」

(1) 目標と指導と評価の一体化

本校は、めざす生徒の育ちの姿や学びの成果を目標とし、その実現をめざして見通しのある指導を展開し、その結果を評価することでどのような学びがなされ、どのような育ちが実現したのかを確かめ、その結果を次のステップに生かしていく「目標と指導と評価の一体化」による教育活動を行い、生徒の育ちの姿にこだわる授業・学級づくりを行っている。

学校は子どもが賢くなる場所であり、自信をつける場所である。わかることやできることが増え、豊かな考え方や感じ方ができるようになるだけでなく、教師や仲間認められて「ぼくだってできるんだ」という自己肯定感を育てるところである。そのために「いいとこ見つけ!」カードを活用して 15 歳の育ちの姿を目標に指導と評価を積み重ねている。さらに授業を通して「少し興味を持たせ、今より少し考えさせる」ために、「ほめ・励ます」ことを指導的評価として、単元や 1 時間の授業の目標や内容に即した「ほめ・励まし」のこぼれを生徒に返すことで育てたい方向を指し示し、目標と指導と評価の一体化を進めていっている。

○評価にこだわる指導とは、結果としての子どもの育ちの姿や学力にこだわり、責任をもつ指導であるが、それは具体的には次の三つの条件を満たす指導であると考えられる。

- ① 「指導の成果は上がっているのか」の問いに、客観的な事実をもって答えることのできる指導
- ② 「その成果で十分なのか」の問いにも、客観的な事実や具体的な変容の姿で答えることのできる指導
- ③ 上がった成果を積極的に取り上げ、子どもに返すことによってほめたり、励ましたりすることを怠らなく行っている指導

成果を上げ、それが目標に目配りをした成果であっても、その成果を子どもに返してほめたり、励ましたりしないようではまだ十分な指導とはいえない。なぜなら、学校は子どもが賢くなるために来る

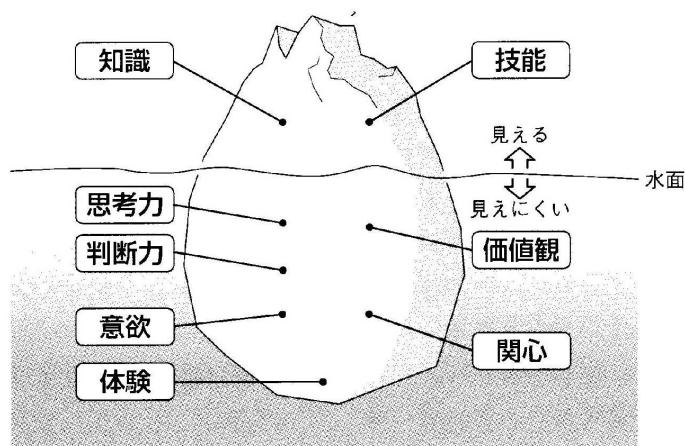
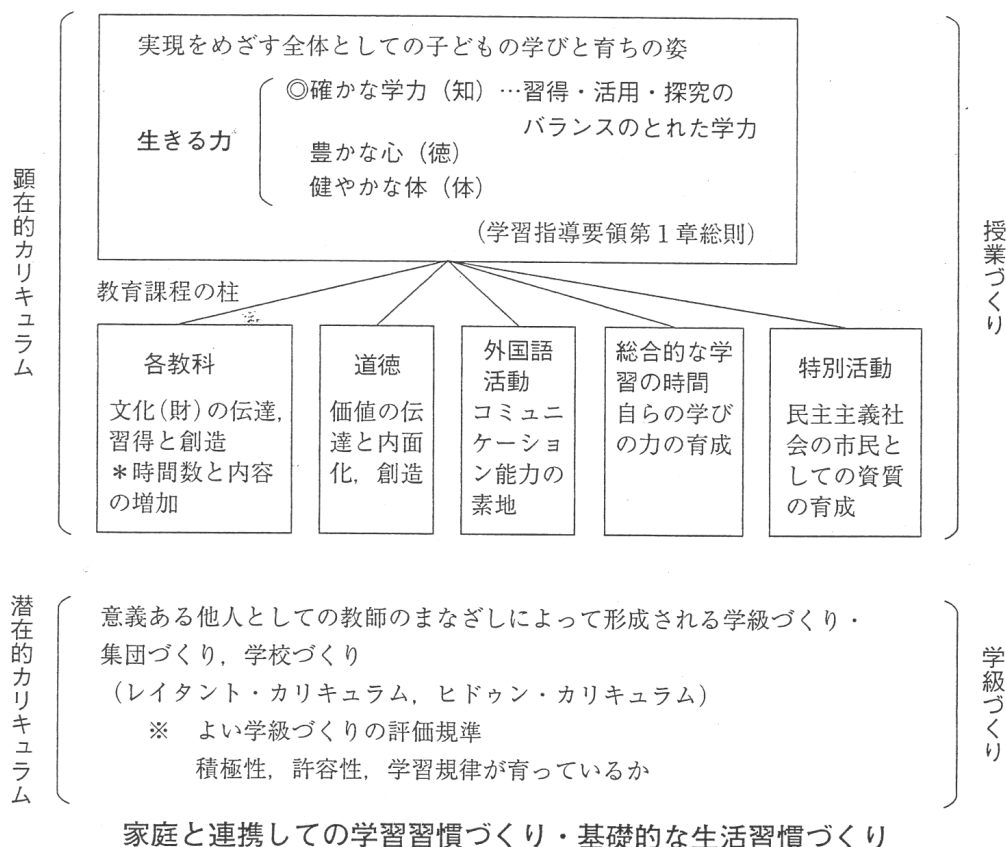


図1 見える学力・見えないところの育ちの「冰山モデル」

るところであるが、できることやわかることが増え、ものの見方や考え方、感じ方が豊かになるだけでなく、その成長を教師や友達に認められて自信を付けるところでなければならないからであり、換言すれば、肯定的な自己概念、自尊感情を育てるところでなければならないからである。そのために必要な手だては、学習の成果や成長の事実を積極的に取り上げてほめて返すこと、またがんばりどころや課題を示しながら励ますことである。

(加藤明 (兵庫教育大学大学院教授)「プロ教師のコンピテンシー次世代型評価と活用」平成 20 年 10 月)

◎学校教育・実践的能力の守備範囲（教育課程の横断的構造）



（中略）

この図の顕在的カリキュラムの部分はそのまま学習指導要領の章立てでもあるが、各教科や道徳等の教科や領域といった各教育課程の柱の成果統合してめざす学校教育全体としての目標が「生きる力」であり、これを「確かな学力」を軸として実現をめざすのが新しい教育課程の強調点である。

さらにこの「確かな学力」とは習得・活用・探究のバランスのとれた学力とされ、特に各教科においてはこの学力の実現をめざして指導の積み重ねがカリキュラムの見通しのもとに展開されなければならない。（加藤明（兵庫教育大学大学院教授）「一人ひとりの子どもが輝く通知表記入文例集」平成23年7月）

○「ほめことば」は、一人ひとりの成果の様相を見取り、取り上げて返すだけでなく、そのような成果を上げるために前もって準備しておかねばならないことを明らかにする教材研究と直結しており、さらに指導の中での「ほめことば」を改めて文章化してほめ直すのが通知表の所見でなくてはならないという所見の本来の機能のためにも有効なものである。

（加藤明（兵庫教育大学大学院教授）「一人ひとりの子どもが輝く通知表記入文例集」平成23年7月）

○「ほめことば」や「励ましのことば」は書く単元の内容に即し、観点ごとの目標の実現について指導の成果を見取るための目のつけどころを表したものである。このような作業を予めしておくことは、評価を形成的に機能させ、成果を確かめながら指導を臨機応変に創造、展開するために必要で効果的なことである。それだけでなく、このような「ほめことば」「励ましのことば」は、評価の最も大切な機能である学習の成果を学習者に返すためのものでもある。（中略）

「関心・意欲・態度」といった情意領域や、「思考・判断・表現」といった高度な認知領域の観点からの目標は、そのようには成果が返らない。目標が単一の要素から構成されていないので短時間で成果が上がりにくいし、目に見える形で成果が現れにくい。前述の到達目標に対し、向上目標（方向目標）に属するものであり、以前と比べての向上や成長を期待するものであるからである。

例えば、以前に比べてすぐにあきらめず粘り強く取り組めるようになったとか、1つの解き方に満足して終わらず別のもっと速い解き方を考えるようになった、友達の考えをよく聞いて自分の考えと比べるようになった、自分の考えが伝わるように図や表などを使って分かりやすい表現を工夫するようになった等々の「ほめことば」を、成果を見取ってすかさず子どもに返すなどがその例である。問題が解けるかどうかによって評価するだけではなく、思考のプロセスや一人ひとりの向上や伸びを「ほめことば」で、課題やがんばりどころを「励ましのことば」によって積極的・意図的に取り上げて返すこと、これが評価の本質的な機能である。

(加藤明 (兵庫教育大学大学院教授)「一人ひとりの子どもが輝く通知表記入文例集」
平成 23 年 7 月)

○前述の「知識・理解」「技能」の観点の成果においても、教師からの「ほめことば」や「励ましのことば」が効果的であることはいうまでもない。テストを返す際に「よくがんばったね」「一所懸命がんばっていたのに残念だったね。勉強の仕方を考え直してみようか。また相談においでよ」といったことばを添えることは大変効果的である。先生は私のことを見ていてくれる、見守っていてくれるという信頼感が増すからである。

それだけではない。そのような指導の過程での「ほめことば」や「励ましのことば」による意義ある他人としての教師のまなざしが「◎学校教育・実践的能力の守備範囲 (教育課程の横断的構造)」で表した授業づくりを支える学級づくりを形成する最も重要な要因なのである。先生が一人ひとりの子どもにかけるまなざしが、他の子がその子を見るまなざしになり、学級の風土、雰囲気形成される。このような潜在的カリキュラムに支えられて日々の授業が成り立つのである。

(加藤明 (兵庫教育大学大学院教授)「一人ひとりの子どもが輝く通知表記入文例集」
平成 23 年 7 月)

○教師はほめ上手、励まし上手だけでなく、叱り上手にもならねばならない。叱り上手とは、長く説教しないこと、こぶしのおろしどころを考えて叱ること、つまり逃げ道をつくりながら叱ること、さらに過去にさかのぼらないこと等を守って叱ることである。

(加藤明 (兵庫教育大学大学院教授)「一人ひとりの子どもが輝く通知表記入文例集」
平成 23 年 7 月)

(2) ひろしま型カリキュラムを基盤に、思考力・判断力・表現力の育成

ひろしま型カリキュラムは生徒に思考力・判断力・表現力を育成することを目標としている。特に言語・数理運用科は、「情報を取り出す力」「思考・判断する力」「表現する力」を育成することを目標としており、教科横断的な思考や各教科で身につけた知識や技能を活用する力を身に付けることをめざしている。

本校はひろしま型カリキュラム言語・数理運用科の授業づくりを通して、すべての教科において思考力・判断力・表現力を向上させるための授業改善に取り組んできた。その中で基盤である言語力の育成が不可欠であることが明らかになった。そこで、思考力・判断力・表現力の向上と「話すこと・聞くこと」「読むこと」「書くこと」という国語科の領域との関連性を重視した、全教科で取り組む「言語力のめあて表」を作成し、発達段階に応じて活用している。また今年度は、授業の中にキーワード等を位置づけ、板書計画、ノートやワークシートを工夫し授業を振り返ることで、語彙力を身につけ基礎的・基本的な知識や技能の定着を図るとともに言語力を育成していこうとしている。

○「ひろしま型カリキュラム」が求めている学力とは、新学習指導要領、PISA 調査、最近の学力調査等に共通するものである。それは、児童生徒が 10 年後、20 年後の実生活・実社会を生きていくために必要な「生きる力」そのものである。

具体的には、自己理解・自己責任、意志決定力、将来設計力といった「主体性・自律性」を確立するために必要な力、協調性・責任感、表現力、人間関係形成力といった「自己と他者との関係」をつくる力、社会・文化・自然理解、言語・情報・知識・技術の活用力、課題発見・解決力といった「個

人と社会の関係」をつくっていく力である。そのために学校教育では、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」という知・徳・体のバランスのよい目標の実現が目指されることになる。その中で、教科等で育成することが目指される「確かな学力」としては、「基礎的・基本的な知識・技能の習得」「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等」「学習意欲」の実現が課題とされる。(小原友行(広島大学大学院教授)「言語活動実践ガイド」平成23年6月)

○「この単元では、この言葉、この概念がわからなければならない。そして、これらが使いこなせなければならない。」といった単元のキーワード、キーコンセプトは、授業設計の中に位置づけておかなければなりません。扱い方も、1回出てくるだけでよいではありません。何度も違う文脈の中で扱われることが定着させる上で大事になります。

キーワード・キーコンセプトを仕組みながら、1単元の授業の流れをおおまかにつくります。そして、最終的に単元指導計画ができ、さらに肉付けして入念な指導案ができるわけです。

(梶田叡一(IPU・環太平洋大学学長)「改訂実践教育評価事典」)

○このような振り返りに、ノートを見るという方法を加えるとよい。そのために求められるのが、ノート指導の充実である。これは「表現」が観点として新たに加えられた背景としての言語力の育成にとっても効果的である。今回の教育課程の改訂によって、国語科だけでなく全教育活動を通して強調された言語活動の充実とは、技能としてはコミュニケーションの道具としての話す、聞くと、認識、思考の道具としての読む、書く能力を育てること、ただし、話す、聞くという音声言語にとどまらず、読む、書くという文字言語に軸を移すようにすること、これらの技能の基盤としての情緒力・想像力、論理力、語彙、文法力等を統合して表現力を併せて養うこと。

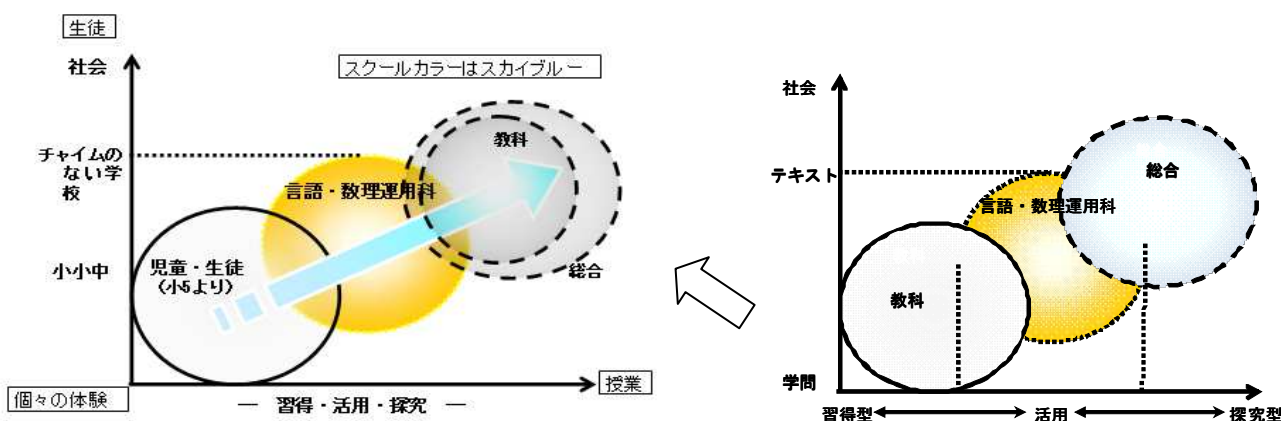
ノート指導は、これらの4技能の中心に位置する「書く」といった文字言語を駆使しての思考や表現に効果があるだけでなく、一人ひとりの思考力や表現力の向上の足跡を確かめるためにも効果的である。(加藤明(兵庫教育大学大学院教授)「一人ひとりの子どもが輝く通知表記入文例集」

平成23年7月)

- 1 ひろしま型カリキュラムは学力育成型のカリキュラムである。基礎・基本の力は国語科、算数・数学科でつけ、言語・数理運用科で思考力・判断力・表現力をつけることをねらっている。
- 2 シラバスは学力育成の年間計画である。どのような力(基礎・基本、思考力・判断力・表現力等)をつけるのかという視点で作成し、学習指導に活用する。
- 3 思考力・判断力・表現力等の育成のために言語活動の充実が求められている。そのためにはつきたい力を明らかにし、意欲を持って学習に取り組むことができるように授業改善を進めていくことが大切である。
- 4 学習指導計画を教師と生徒が共有することで、生徒は見通しを持って学ぶことができる。生徒に自主的に学ぶ態度を育成することができる。また、授業の振り返りをする場合は考える場を与えることである。書くことは考えることであるので、自分が考える場、人と一緒に学習したこと、全員で考えたことなどが保障されたノートづくりが大切である。

「賢者は歴史を語り、愚者は体験を語る」

(吉田裕久(広島大学大学院教授)「五日市南中学校研究会講演会より」平成23年7月)



【引用文献・参考文献一覧】

加藤明 著 「一人ひとりの子どもが輝く通知表記入文例集」 教育開発研究所 平成 23 年

加藤明 著 「プロ教師のコンピテンシー 次世代型評価と活用」 明治図書 平成 20 年

梶田叡一・加藤明 監修・著 「改訂 実践教育評価事典」 文溪堂 平成 22 年

広島市教育委員会編著 「言語活動実践ガイド 思考力・判断力・表現力を高める

『ひろしま型カリキュラム』 ぎょうせい 2011 年

文部科学省 「中学校学習指導要領」 東山書房 平成 20 年

文部科学省 「中学校 キャリア教育の手引き」 平成 23 年

文部科学省 「生徒指導提要」 教育図書 平成 22 年

廿日市市立七尾中学校公開研究会資料 平成 15 年

